

令和4年度 ASPUnivNet 活動評価

1. 学校のユネスコスクール加盟を支援します。

3年に及ぶコロナ禍の影響により、学校現場においては新たなアクションを起こしにくいマインド環境であり、新規加盟は限られていたと思われませんが、各大学においてはニーズに応じて適切に対応されていたと判断します。

既存のユネスコスクールにおいても学校ごとの温度差はあるものの、この間のコロナ禍を通して、むしろ持続可能性についてより実感をもって課題意識を高め、質的向上のきっかけとなり、それに対する支援に成果が見られた大学もあり評価します。

2. 大学の持つ知的財産をユネスコスクールの活動に提供します。

期待される4つの機能の中では最も機能していると評価します。各大学の地域特性、教員の専門性、ネットワーク等を高度に活かし、学校現場だけでは持ち得ないコンテンツ、プログラム、リソースの提供がされており、高く評価できると考えます。

一方で、学校現場におけるESDへのアプローチは多様化しており、大学側の専門性に加えて今後多様化するニーズへ応える支援についての検討、開発、発信も期待します。

3. 地域の教育機関とユネスコスクールとの連携を促進します。

地域によるニーズ、温度差が大きいかと推察されますが、ESD推進コンソーシアムやブロック内の大学連携を進めたり、教育委員会、首長部局、社会教育機関等とユネスコスクールとの接点を積極的に創出することで、認知度の向上、人的繋がりに寄与していると考えます。

ユネスコスクールによっては、テーマや領域を固定せず、課題解決学習を進めている学校も多く、単に連携の場の創出のみならず、各学校のニーズに合った連携先とのマッチング機能にも期待します。

4. 国内外のユネスコスクールとのネットワークづくりを支援します。

ブロック大会や大学主催のイベント等を通して、ブロック内外のユネスコスクールの交流や連携企画を創出している取組もみられ、機能していると考えます。

国際的な交流、連携も積極的に創出している大学もありますが、各学校における認知向上に向けた広報や各学校のニーズに合わせたコーディネート機能にも期待します。

5. その他の活動

大学・大学院では、それぞれの位置付けをもって積極的に実施されていると判断します。

6. 地域間での分析・評価

ESD/SDGs の推進については、ユネスコスクールのみならず、どれだけ多様なステークホルダーとゴールの共有をした連携を進めることができるかが重要であると考えます。大学、ユネスコスクール、ユネスコ関係機関に閉じることなく、民間企業、NPO、行政機関等との連携機会の創出についても、ASPUnivNet はじめ関係者の皆様に期待します。

以上

令和4年度 ASPUnivNet 活動評価

1. 学校のユネスコスクール加盟を支援します。

1. ユネスコスクール加盟を希望する地域の学校から相談があったときにそれに応じることができた。

23校中8校で相談の事例無し。ただし事例なしの内1校は2021年度に相談を受けた学校がキャンディデート校になったため、それを継続して支援したとあるので、実質支援ありと判断した。昨年度と同じ項目を見ると「事例無し」が23校中8校であったので、今年度も同じとなる。

「事例あり」とした学校のほとんどは、相談を受けた学校名、校数あるいは具体的な相談内容を記入している。

2. ユネスコスクール・チャレンジ期間実施校に対する相談に応じることができた。

23校中5校が実施無し。昨年度の実施無しが2校であったので微増。先に述べたCOVID-19の影響が大きいと考えられる。

3. 地域の加盟済のユネスコスクールに向けてESD/SDGsをリードする学校としての「質の向上」にかかわる支援を行うことができた。

23校中6校が実施無し。昨年度の実施無しが3校であったので微増。先に述べたCOVID-19の影響が大きいと考えられる。

実施した学校については、その内容や対象校等が具体的に記載されていて、良い参考となると考える。

対外的な活動はCOVID-19感染防止のため、あえて活動を自粛した学校もあると思われる(これは他の対外的活動も同様)。COVID-19感染が一区切りしたので来年度以降の積極的な活動推進に期待したい。

昨年も同様のことを述べたが、この項目は広報と密接に関係すると思われるので、広報について議論していただければと思う。

2. 大学の持つ知的財産をユネスコスクールの活動に提供します。

1. 大学の資源を活用して、地域のユネスコスクールに向けた支援(資料提供やコーディネート、出前授業やワークショップなど)を行うことができた。

2校が実施無し。昨年度は全大学が実施。

支援を実施した大学は、大学が自ら支援を主催したとする大学と、要請により対応したという大学に分けられる。これを同様の観点から評価してよいのか、評価する側から

すると悩ましいところである。

2. 研修会やワークショップを地域のユネスコスクールと協働して開催することができた。

4校で実施無し。昨年度は2校が実施無し。

実施内容は、研修会・ワークショップ・事例発表・フォーラム・セミナー・展覧会・勉強会・活動成果発表会・ツアー・出張講義・交流会・講演会と多岐にわたる。

3. 大学の資源を活用して、地域のユネスコスクールと協働で教材やモデルプロジェクトを開発することができた。

9校で実施無し。昨年度は8校が実施無し。

実施校での内容は、リソースのオンラインでの公開、ユネスコ検定の開発、教材開発、啓蒙ポスター作成/配布・実践記録作成・授業モデル開発・アプリ開発・ESDカレンダーモデル作成・SDGsカレンダー作成等多岐にわたる。

前述と同様の理由から昨年度に比べて「実施無し」の大学が微増している。ただ実施した大学については成果を積極的に公開、特にオンラインで公開する大学が増え、成果に容易にアクセスできるようになったことを高く評価したい。

昨年も同様のお願いをしたが、折角オンラインで情報を公開する大学が増えてきたので、ポータルサイトのようなものが作れないか検討をお願いしたい。

3. 地域の教育機関とユネスコスクールとの連携を促進します。

1. 地域のステークホルダーにユネスコスクールの存在や意義について広く知らせることができた。

5校で実施無し。校数は昨年度と同じ。

地域のステークホルダーとして挙げられているのは、教育事務所・地方ESD活動支援センター・教育委員会・PTA研修会・青年会議所・ユネスコ連絡協議会・ユネスコ協会・市環境啓発施設運営会議・域内首長部局・地方議員・生涯学習推進センター・総合教育センター・ESDコンソーシアム・JICA地域事務所・地方公務員・地域の企業・自治会・小中高等学校等々である。またそこで行われた活動も講演会や研修会の実施・講師派遣・広報周知・資料送付・協力の依頼等幅広い分野にわたっている。

2. ユネスコスクールと地域の多様なステークホルダーとを結びつけることができた。

6校が実施無し。昨年度は8校が無しだったので微減。

1.と同様挙げられている地域のステークホルダーは多様。また活動の内容も研修会等

への参加要請・WEB 広報・連携提案など様々。

3. ユネスコスクールに関連した地域教育委員会との連携や地域における大学間の連携を促進することができた。

5校が実施無し。昨年度は4校が実施無しだったので微減。
連携促進の内容が昨年度に比べ具体的に記述されている。

より多くの対象に様々な方法でアプローチしていることを高く評価したい。

「広く知らせ」「結びつけ」「促進」した結果どのようなフィードバックがあったのか知りたいところである。

4. 国内外のユネスコスクールとのネットワークづくりを支援します。

1. 地域をこえた国内外の多様なステークホルダーにユネスコスクールの存在や意義について知らせることができた。

9校が実施無し。昨年度は7校が無しだったので微増。

学会や学術会議での発表や企画、指導者研修・外国大学との交流や連携・交流会の開催等の活動が行われており、その成果が期待できる。

2. 地域をこえた国内外のユネスコスクールと協働で活動することができた。

8校が実施無し。2校は企画/模索中。実施無しは昨年度と同数。

実施・企画/模索中の15校の内、6校が国外と協働(または企画/模索)している。

協働の内容が具体的に記述されている大学が昨年度に比べ増えている。

3. ユネスコスクールがグローバルな活動することについてそれを支援することができた。(例：ユネスコスクールの国境を越えた交流、海外とのオンライン交流、海外のプロジェクトへの参加など)。

11校が実施無し。昨年度は12校が無しだったので微減。

(昨年度は「グローバルな活動」の解釈に異同があったように思われたが)今年度は実施した12校全てが国を越えた、あるいは越えることを想定した活動の支援を行っている。

支援の対象が多岐にわたり、内容がより具体的に記載されるようになったことを高く評価したい。

5. その他の活動

- 1. 大学内でユネスコスクールの存在や意義について広く知らせることができた。**
1校のみ実施無し。昨年度は3校が無し(またはそれに近い回答)であったので減。
実施した大学の内6校はWEBでの情報公開を行っている。その内3校はURLも記載している。
- 2. 学部大学院の教育課程でユネスコスクールにかかわる教育を行うことができた。**
3校が実施無し。1校が不明。昨年度実施無しは5校であったので微減。
具体的な教科/ゼミ名を挙げている大学と「関連する科目」等としている大学とがある。
後者には多くの科目でユネスコスクールにかかわる教育を行っていると言める大学もあった。
より多くの大学で、様々な方策によりユネスコスクールにかかわる教育を行っていることを高く評価したい。
- 3. 調査研究活動でユネスコスクールに関連した調査研究を行うことができた。**
12校が実施無し。昨年度実施無しは11校だったので微増。
昨年度もこの項目が最も実施無しが多かった。調査研究はハードルが高いのか。
実施した大学の内1校を除く大学が調査研究の内容を記載している。現在進行中の調査研究もありその成果の公開が待たれる。
- 4. 自由記述**
12校が自由記述に記載あり。それぞれが大変興味深い内容であるので、詳細あるいは成果を広く公開していただければと思う。

6. 地域間での分析・評価

多くの大学で地域を越えた事業の実施ないしは計画が行われていることを高く評価したい。
地域を越えた支援事業を実施するためには、各大学にどのようなリソースがあり、どのような支援が可能かを積極的に広報する必要があると考える。

7. 付言

評価項目で「無し」と回答した場合、その理由を記述することは難しいでしょうか。
実施事例(成果事例)と同様に「出来なかった理由」も将来の活動実施の良い情報となると思うのですが。

以上

令和4年度 ASPUnivNet 活動評価

1. 学校のユネスコスクール加盟を支援します。

おおむね順調に実施されていると判断します。

地域の実情により、加盟を希望する学校数や当該学校と各大学からのアプローチの難易度等に違いがあるものと推察致します。また、長引く Covid19 の蔓延に伴って支援に制約が生じていることもあると思います。それに応じて支援のあり方も多様であることと思います。今後とも、その都度最適と判断される方法での支援を実施されるよう希望致します。

2. 大学の持つ知的財産をユネスコスクールの活動に提供します。

おおむね順調に実施されていると判断します。

地域の実情により、加盟を希望する学校数や情報提供にかかわれる大学教員数等に違いがあるものと推察致します。それに応じて支援のあり方も多様であることと思います。今後とも、その都度最適と判断される方法での支援を実施されるよう希望致します。

3. 地域の教育機関とユネスコスクールとの連携を促進します。

おおむね順調に実施されていると判断します。

大学ごとに実質的に担当する地域の広さや実情が多様であるものと推察致します。それに応じて支援のあり方も多様であることと思います。Covid19 の蔓延を契機としてイベントのオンラインで開催も模索されていますが、発信する大学の体制が整っても、受信サイドの体制には格差が大きく、対面での実施に代わる方法として定着するにはまだ時間がかかることと思います。今後とも、その都度最適と判断される方法での支援を実施されるよう希望致します。

4. 国内外のユネスコスクールとのネットワークづくりを支援します。

おおむね順調に実施されていると判断します。

Covid19 により人の移動が制限され、一堂に会する、海外を視察する、といった活動の制限がまだ続く状況下で、代替策の模索が行われたことと思います。関係各位のご尽力に敬意を表します。Web 会議による交流やインターネットを介した情報発信が、対面の交流に次ぐ策ではなく、従来以上に大きな意義を持つことになるでしょう。多難な状況下ではありますが、新たなネットワークのあり方を模索していただければと希望します。

5. その他の活動

おおむね順調に実施されていると判断します。

国内外の社会情勢の激変に伴い、国際交流・国際貢献のあり方について再検討しながら活動のあり方を模索されたことと拝察いたします。今後とも、その都度最適と判断される方法での支援を実施されるよう希望致します。

以上

令和4年度 ASPUnivNet 活動評価

1. 学校のユネスコスクール加盟を支援します。

日本に世界最多のユネスコスクールがあり、ESD が推進される土壌があるのは、加盟支援をされる ASPUnivNet 参加大学の力によるところが大きいと評価しております。支援に力を入れている大学は、ESD の具体的な実践例の web 発信、ユネスコスクール同士の交流会の促進、シンポジウム開催、教員対象の ESD 勉強会等、幅広い取り組みをされています。一方で、大学により支援の頻度や内容は様々で、充実度に差も生じているように拝見しました。担当地域の学校が、ESD に力を入れている自治体にあるか否か、あるいはコロナ禍による影響などの要因もあろうかと思えます。しかし、web 等の情報発信や地元の教育委員会との協力など、可能なところから取り組まれ、担当地域におけるユネスコスクールの認知度や活動内容・質の向上に助力してほしいと考えます。

2. 大学の持つ知的財産をユネスコスクールの活動に提供します。

「ユネスコスクール地方ブロック大会」、「ワークショップ」、「オンライン勉強会・交流会」が多く活用していると拝見しました。ESD/SDGs 教育ならびに、2022 年度から学習指導要領にも盛り込まれている総合的な探究の時間の運営には、実践形式の授業が不可欠となりますが、これは教員にとっても自身があまり経験していないことを生徒に伝え、導くこととなります。そのため、他の実践例を見たり、成功・失敗体験や悩みを共有したりする場は大変重要です。大学が音頭をとって実践例を提示したり、発表やワークショップの機会を設けたりすることは全体的な質の向上につながることを期待されます。今後も引き続き、積極的に開催されることを願っております。

3. 地域の教育機関とユネスコスクールとの連携を促進します。

大学により差があるように感じました。1.でも述べたように、特に ESD 教育に関心のある市区町村、教育委員会が近くにあるか否かという外的な要因もあるかと思えます。ただ、教育委員会だけでなく、各地域にある民間のユネスコ協会や JICA などの ESD/SDGs に関連ある団体、地域に根差した企業やメディアとも連携を図ることは可能です。例えば日本ユネスコ協会連盟が三菱 UFJ 銀行の協力のもとで行っている、「ユネスコスクール SDGs アシストプロジェクト」では、地域の企業に協力をいただいて活動する学校も多く、地域の新聞等のメディアにも多く取りあげられています。大学からの声掛け等力添えがあれば、ますます連携の促進につながるのではないかと思います。

4. 国内外のユネスコスクールとのネットワークづくりを支援します。

2021 年に文部科学省が発表した「ユネスコスクールの新たな展開に向けて」の中で、ユネスコスクールは、国内外のユネスコスクール相互のネットワークを介して、互いに

交流相手の良さを認め合い、学びあうことが期待されているが、日本では、実態として十分な交流が行われていないことが課題として指摘されています。各大学の自己評価から、地域のユネスコスクールに呼び掛けたり、大学と関係のある海外の学校との交流を仲介したりする事例を複数拝見しました。他方、1000校を超えるユネスコスクールのネットワーク構築を大学のみで負うのは、広がりという意味で限界もあろうかと思えます。大学の仲介による交流が先進事例となりつつ、各学校でも自発的に、国内外のユネスコスクールのネットワークを活用して、交流を実現する動きも促進されるような工夫もできれば理想的だと考えます。

5. その他の活動

ゼミナールや必修科目の中にも ESD/SDGs 教育に関わる授業を置くなど、ESD/SDGs 教育に力を入れていることを学生や高校生に意識的にアピールしている大学の事例を複数拝見し、印象的でした。また、中には実際にユネスコスクールに学生が足を運び、実際の活動に参画するような取り組みを行う大学もありましたが、このように大学の授業が学生だけでなく、関連するユネスコスクールにも還元される仕組みはネットワークの活性化にもつながるので、今後より盛んに行われていくことを期待しています。

6. 地域間での分析・評価

宮城県、東京都、愛知県、広島県には加盟大学が複数あるのに対し、北海道、北陸、四国、九州、沖縄は加盟大学が1つしかないことから、大学によってかかる負担や交流活動のしやすさも異なるかと思えます。そのため、例えば金沢大学は北陸三県のユネスコスクールと積極的に交流を行っていますが、信州大学をはじめとした他地域の加盟大学との連携を足掛かりとして交流の輪が広がれば、双方がより建設的な活動を展開していけるのではないかと考えます。関東ブロック（東京都・神奈川県）の4加盟大学が行っている連携や、広島大学・広島市立大学と広島ユネスコ連絡協議会との連携といったものが、より大きな形での連帯となることで、ユネスコスクールのネットワークの促進はもちろん、ユネスコスクール以外の学校にも波及し、日本全体における ESD/SDGs 教育の発展につながることを期待しています。

以上